

自駒妃登美の  
なでしこ  
歴史物語  
7

日本の悠久の歴史をひもとけば、そこにはわが国を支えてきた「なでしこ」たちの存在があります。福岡の人気歴史家・白駒妃登美さんに、そんななでしこたちの知られざる歴史物語を紹介していただきます。

博多の歴女 **白駒妃登美**

今回は、窮地に追い込まれながらも時代を超えて人々を魅了する、美しい生き方を示した女性・静御前をご紹介します。

時は平安時代の末期。静は「白拍子」という歌舞を演じる仕事をしており、母娘二代にわたる舞の名手として、その名は都じゆうに知れ渡っていました。

ある時、日照りが続いたことを憂えた時の為政者・後白河法皇が、百人の白拍子を集めて雨乞いの舞をさせたところ、九十九人まで効果がなかったのですが、百人目の静が舞うと、たちまち黒雲が現れ、三日間雨が降り続いたといいます。

いわば神さまをも感動させてしまうほど美しい舞だったのでしょう。しかし、その美しさに心を奪われたのは神さまだけではありませんでした。その場に居合わせた一

都ナンバー1の舞

静御前と北条政子 ①

ピンチにも凛と花咲く美しさ



静御前（生没年不詳）  
平安時代から鎌倉時代にかけて名を馳せた白拍子（歌舞を演じる女性）。才色兼備であり、平家討伐の立役者・源義経に舞姿を見初められて側室に。【青い苺環の花を背に歌舞を演じる静御前】

人の青年が、恋に落ちたのです。青年の名を源義経といいます。源氏の血筋に生まれ、兄・頼朝と共に平安時代から鎌倉時代へと、新たな時代を切り開いた武将として知られていますね。

そんな源氏の御曹司と、都随一の白拍子。二人の恋はまたたく間に都じゆうの噂となりました。そして二人は身分の違いを超え、深く愛し合うのです。

静御前、捕われの身に

けれども、二人の幸せな日々は長くは続きませんでした。平家追討の立役者だった義経は、兄の不興を買って、一夜にして追われる身となるのです。義経と静はいつまでも共に生きたかったです。二人はやむなく雪深い吉野の山中で別れることに。その後、義経は奥州へと落ちのび、静は

【イメージイラスト】アオジマイコ